無料
ご自由にお持ち帰り下さい

平和で豊かな沖縄県を目指す情報誌

沖縄協会だより

2020.6
No.16

平和の絵ー「戦争と平和」

20点連作ー第18作

西村計雄 作

原始の野鳥たち

ノグチゲラ、ヤンバルクイナ、カンムリワシの世界

300号
176×274×6.5cm

沖縄
平和祈念堂
所蔵絵画紹介

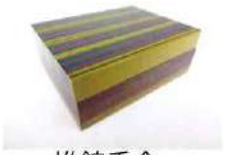
〈制作意図〉 貴重な自然界を彩る光と影。輝く日の光に包まれ、天空を翔けるカンムリワシ。県鳥・ノグチゲラは明るい未来への扉をノックし、クロツグの繁みにはヤンバルクイナの群れが憩う。闇を照らす月かげを浴びて活動をはじめるコノハヅクたち。この限りなき自然の恵を永遠に･･･。
(昭和59年6月7日寄贈)

西村計雄(明治42年・北海道生まれ)
東京美術学校卒、藤島武二に師事。1943年文展(現・日展)特選。戦後早稲田中学校と高等学校の教師を勤め、51年に42歳で単身渡仏する。ピカソの画商カーンワイラー氏との出会いを契機に、53年よりパリを中心にヨーロッパ各地で個展を開催。その作品は、フランス国立近代美術館やパリ市美術館に買い上げとなった。フランス芸術文化勲章、共和町立西村計雄記念美術館開館。
2000年12月4日没。

沖縄協会は、沖縄が本土に復帰するまでの間、各種の援護活動を行った特殊法人南方同胞援護会(昭和31年～47年5月)の後を受けて、昭和47年9月20日に設置された内閣府所管の公益法人です。新たに設立した財団法人沖縄協会は、南方同胞援護会の実績と経験を活用して、沖縄の振興施策に積極的に協力し、平和で豊かな沖縄県の建設に寄与してまいりました。平成23年(2011)4月1日、沖縄協会は内閣総理大臣より公益財団法人として認定を受けて「公益財団法人沖縄協会」として新たな一歩を踏み出しました。これからも、沖縄県の健全な発展と幸福な社会形成に役立つ事業を行いながら、沖縄平和祈念堂を管理運営することで、平和で豊かな沖縄県の建設に貢献していきます。

公益財団法人 沖縄協会

山田真山から受け継いだ技術

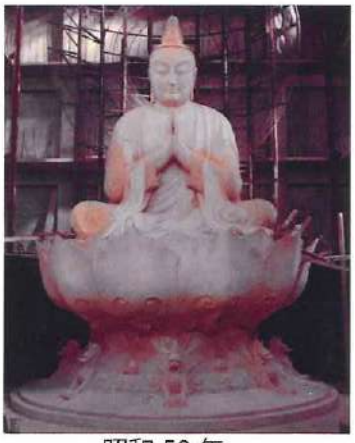

堆錦香合

漆芸家　糸数　政次

私が、漆芸の道を志す原点になったのは、故山田真山画伯に師事し平和祈念像の制作に従事することになった20歳の時でした。宜野湾市民でありながら偉大な芸術家である山田画伯が世界恒久平和を願い精魂を込めて平和祈念像を制作されていることも知らず、合掌した大きな像を見たときは凄い衝撃を受けました。

原型制作から16年経過した昭和48年、原型が完成に近づいた頃、平和慰霊像を政府の復帰記念事業として建立する予定でしたが、政府から無宗教の状態でなければならない旨を告げられます。平和慰霊像台座が特定宗教に偏らないように、蓮弁台座から「真理の花」炎の形へ作り直して昭和50年4月に原形が完成しています。その年に平和慰霊像から平和祈念像に改められています。

昭和48年


昭和50年

像の形は、東洋古来の芸術の伝統美を生かしながら、平和を祈念する人間像の極致をモチーフにした合掌する座像です。山田画伯は当初、青銅の鋳造とする予定でしたが、沖縄独特の漆工技術「堆錦」を独自で研究開発した乾漆造りの立体堆錦像に変更しています。理由は、伝統技術を駆使し立体化を工夫した堆錦像の芸術的効果は鋳造像より遥かに優れており、堅牢で耐久力が強いこと。更に、堆錦技術を体得した人が徐々に亡くなり消滅の恐れがあるため、像を立体堆錦にすることで沖縄独自の文化的遺産として後世に伝え、世界に類のない芸術性の高い平和祈念像にするためでした。

山田画伯に師事したときは、体調を崩されて入院していたため、直に手ほどきは受けていませんが、アトリエにあるスケッチ、油絵、水墨画、彫刻、陶芸作品、立体堆錦作品、研究試作等を拝見したことで非常に勉強になりました。制作工程での石膏型取り、堆錦餅制作、堆錦型押し、乾漆造り、組立て作業で立体堆錦技術を学びました。漆カブレや夏場の過酷な作業は大変でしたが、特殊な技術を学べたことは非常に有意義な時間でした。

堆錦餅シート制作

堆錦餅制作では、顔料まみれになりながら騒音との戦いで、1本の重量が1.7kgの堆錦餅の魂を1日に5本～6本の割合で作り、900本で約1.5tの量を制作しました。堆錦型押しでは、山田画伯が平和への執念を深く刻み込んだ、原型の細かい表情やタッチを厳格に写し取るように、指や手のひらで指圧をする要領で堆錦餅のシートを押し込む、この工程は非常に気を使い苦労しました。山田画伯は体調が良い時には、車いすで作業の進み具合を奥様とご一緒に見に来られました。握手を交わし「よろしく頼む」と声をかけられたときには、忠実に遂行しなければならないと思いました。立体堆錦像の完成を待たず92歳で亡くなられたときには、非常に無念でなりませんでした。お通夜の時、先生の安らかな顔を拝見したとき、「託したぞ」と聞こえたような気がしました。天国からの声で、更に気を引き締められた思いでした。

平和祈念像は、昭和53年10月に完成し建立から42年経過しています。毎年実施される浄めで、ひび割れ、剥離など

奥様が山田画伯と一緒に作業の確認

を確認しておりますが堆錦の状態は良好です。漆は、強い接着力と酸・アルカリにもおかされない塗膜の耐久性を兼ね備えた、世界に類を見ない優れた天然樹脂ですが、紫外線には弱い性質があります。祈念像は、屋内に安置されているので劣化は遅いですがメンテナンスは必要です。その時期は、浄めの時に布巾に顔料が付着し堆錦の艶がなくなった時が目安です。42 年間で 2 回補強工事を行っており、今年 6 月に 3 回目の補強工事を行いました。作業は、生漆を溶剤で希釈し堆錦に筋替刷毛で塗布し漆を含侵させた後、漆が乾かないうちに綿や紙でムラなく均一に拭き取る拭漆技術で実施しました。

立体堆錦像制作に携わった事で、石膏型取り、シリコン型取りの技術や堆錦の立体化、乾漆造りの技術技法を習得できたことが大きな財産となりました。平成 2 年から平成 25 年までの 23 年間、研究職として勤務した沖縄県工芸技術支援センターでは、堆錦加飾の簡素化に関する研究に取り組みました。目的は、漆器業界で加飾職人の高齢化が進んでおり、今後、精巧な堆錦加飾を行う技術者が途絶える可能性があります。解決策として、若手職人でも容易にできるように加飾技術の簡素化を図る研究開発を行いました。内容は、試験体を熟練職人が制作した堆錦作品を使用し、シリコンで型取りを行い、型に軟らかめの堆錦シートを指圧の要領で押し込み、堆錦の乾燥具合を確認して器物に貼り付けます。堆錦加飾だけではなく型に漆下地材である錆地を充填し型抜きした後、器物に貼り付けることで錆絵に応用できないか確認しました。

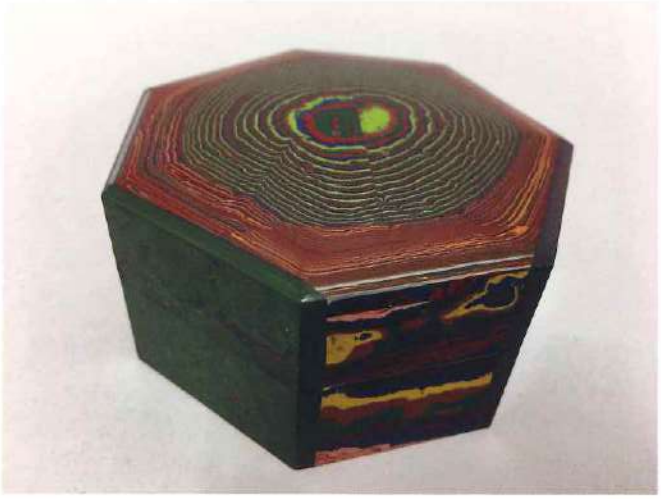
シリコン型は、試験体に型取り用シリコン RTV ゴムを薄く 3 回流し込み、型の強度を持たせるために寒冷紗を張っています。受型は石膏を流し込みで作っています。

シリコン型

堆錦型抜き

試験結果は、シリコン型で試験体に忠実な文様の堆錦型抜きができたので、若手職人でも容易に堆錦加飾することが可能になりました。漆下地型抜きは、形抜けが良いので琉球漆器の新たな加飾技法としての可能性があります。

沖縄県立芸術大学での研究では、立体堆錦技術の応用に取り組みました。研究は、山田画伯から受け継いだ技術を活かして、堆錦を積層し作品本体の素地を堆錦だけで立体化した「堆錦香合」と乾漆素地に積層した斑模様堆錦を貼り付けた「乾漆堆錦香合」を成果として展覧会に出品しました。作品は、立体堆錦技術を後世に伝えるために沖縄県立芸術大学に退任記念として寄贈しました。



乾漆堆錦香合

私は、これからも先生の遺志を引き継ぎ、世界が恒久平和でありますように、平和祈念像の維持管理を一生懸命続けようと思っています。

現在、宜野湾市で沖縄平和祈念像原型を永続的に保存し、平和学習に活用したいと検討されているので、山田画伯が原型制作で苦労された経緯や原型から立体堆錦像に制作された過程を伝えていけたらと願っています。最後に、山田画伯の教えを受け継いで立体堆錦技術を後世に伝えることができるように精進し、作家活動を続けていきたいと思います。

トピックス

★沖縄平和祈念像の拭き漆

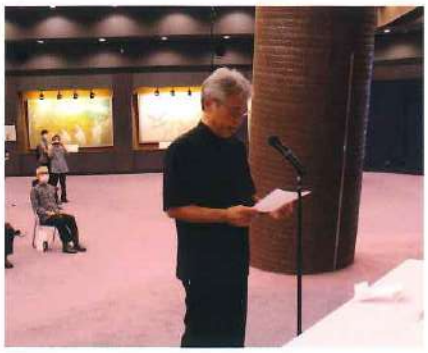
6月11日、沖縄平和祈念像を恒久的に保存するため、平和祈念像の表面に生漆を拭くように摺り込む《拭き漆》の作業が行われた。

この作業は、1997年(平成9年)と2008年(平成20年)に続き3回目の実施。作業にあたったのは、平和祈念像の制作に従事した糸数政次さん(元沖縄県立芸術大学美術工芸学部工芸専攻漆芸分野教授・漆芸家)を含めた県内漆芸家10人。糸数さんは過去2回とも参加している。今回使用した生漆の量は約4kgで、表面に漆が浸透することで祈念像がより頑丈になり、作業終了後には全体に茶褐色の深みと美しい艶が増した。

★令和2年 沖縄全戦没者追悼式前夜祭

6月22日、当協会は令和2年沖縄全戦没者追悼式前夜祭を平和祈念堂で開催した。この行事は、沖縄県、(財)沖縄県遺族連合会、(公財)沖縄県平和祈念財団の共催を得て毎年開催している。今回は、新型コロナウイルスの感染拡大防止を考慮し、ご遺族をはじめ一般の方々のご参列を見合わせていただき、規模を縮小して式典と琉球古典音楽献奏(録音)のみで開催した。式典では来賓各位が参列するなか、「鎮魂の火」の献火、「平和の鐘」の献鐘を合図に「黙祷」を捧げた。次に、野村一成当協会会長代理・上原良幸副会長が「私たちは、現在の生活が幾多の尊い犠牲の上に築かれたことを決して忘れず、戦争への反省と世界平和への決意を新たにし、戦没者追悼の象徴である沖縄平和祈念堂から全世界の人々に、恒久平和の実現を訴え続けていくことを誓う」と鎮魂(しづたま)のことばを述べた。最後に、前夜祭の主題を表す琉歌三首を歌唱する琉球古典音楽の献奏(録音)が行われた。録音の音源は1980年(昭和55年)前夜祭第2回目の記録テープから使用した。

また、前夜祭関連事業の沖縄平和祈念像《浄め》を6月11日に行い、戦没者慰霊と世界の恒久平和を願って平和祈念像の埃を払い浄めた。今回は、漆芸家の糸数政次さんと当協会職員7人で作業を行った。



★平和の魂ー放蝶セレモニー

当協会では、戦後60年事業として、平成17年(2005年)11月6日に「清ら蝶園」を建設し、蝶のことをギリシャ語でプシュケ(「魂」の意)ということから、この蝶園で平和の《魂》としてオオゴマダラを育て、戦没者を追悼し世界平和の実現を祈る沖縄平和祈念像の使者として、毎年慰霊の日に摩文仁の空へ放蝶を実施している。今年は、今般の新型コロナウイルス感染拡大防止のため、当協会職員のみで20匹を放蝶した。

協会関係事業他 募集案内

★第28回金城芳子基金 助成対象者を決定

5月30日、当協会が主催する第28回(令和2年度)金城芳子基金は運営委員会を開催し、応募があった5件の中から、和田陽香里氏の「沖縄県の低SES(社会経済状態)にある母親の育児関連レジリエンスの要因の検討」を助成対象に決定、6月12日に発表した。助成金30万円が贈られる。

★第42回(令和2年度) 沖縄研究奨励賞推薦応募案内

本奨励賞は沖縄を対象とした将来性豊かな優れた研究(自然科学・人文科学・社会科学)を行っている新進研究者(又はグループ)の中から、受賞者3名を選考し、奨励賞として本賞並びに副賞として研究助成金50万円を贈り表彰するものである。

※詳細は、「公益財団法人沖縄協会」のホームページより

沖縄平和祈念堂美術館

沖縄出身画家紹介⑤

大嶺 政寛・作　Seikwan Omine

八重山風景　F50

制作意図

戦前戦後を通じ、那覇・首里の民家風景、北部の山原地方などを描いてきた。昭和37年、艀で渡った八重山の空、海はどこよりも青く、花はより赤く、緑葉は濃かった。赤瓦も本島より明るく輝いているのに感動し、以来毎年のように八重山に渡り、憑かれたように描いてきた。

大嶺政寛(明治43年生・沖縄県)

沖縄県立二中卒、沖縄師範学校卒。昭和8年春陽会展に入選以来、戦前戦後を通じて春陽会に所属(春陽会賞)。戦後は沖展の設立運営に貢献。沖縄民芸協会会長等を歴任。昭和62年没。

● 2020年6月発行
● 発行／公益財団法人 沖縄協会(沖縄平和祈念堂)
〒901-0333 沖縄県糸満市摩文仁448-2 TEL.098(997)3011 FAX.098(997)2678
(HP) http://www.okinawakyoukai.jp